

# 日本語学習者の外来語苦手意識とその受容態度 —英語母語話者の場合— (中間報告)

堀切 友紀子

## 1. 問題の所在と本研究の位置づけ

日本語教育において一般に学習者にとって外来語は「苦手」な項目の一つとされている(プレム1991)が、実際は主にその習得状況に焦点が当てられているのが現状である。しかし、この習得状況と関連して、学習者自身がどのような意識を持って外来語を学習しているのかを明らかにする必要があると考えられる。

また、外来語と日本語母語話者との関係に対しては、国立国語研究所外来語委員会から、「外来語に対する意識調査」や『『外来語』言い換え提案』が発表されており、その外来語観の研究もなされている(鈴木2000)。しかし、同じく外来語を理解・使用する日本語学習者の、外来語に対する意識や態度は明らかにされていないという現状がある。

このことから、本研究の目的は、英語を母語とする日本語学習者が外来語<sup>1</sup>学習時に感じる困難度や苦手意識の実態を明らかにし、それらがどのような関係にあるのかを明らかにすることとする。

## 2. 研究方法

### 2.1 質問紙

外来語習得についての先行研究等をもとに、外来語困難度に対する質問項目を作成した。さらに、外来語苦手意識に関しては、堀切(2003)や日本語母語話者の外来語観(鈴木2000)を参考にし、さらに予備調査等で得られた項目を用いて、項目を作成した。この、外来語4技能習得困難度と外来語苦手意識は、合わせて計42項目から成る。

これに加え、日本語学習者の日本語学習歴やその他、言語背景や学習背景などを問う項目からなるフェイスシートも合わせて作成した。

### 2.2 対象者

日本在住の日本語学習者41名、アメリカ在住日本語学習者72名、計113名を対象に質問紙調査を実施した。今回はそこから得られたデータのうち、

英語を母語とする93名(滞日34名、滞米59名)<sup>2</sup>を本研究の対象とする。

また、今回日本国内で調査した対象者の多くは、日本の大学の短期サマープログラムとして来日して日本語を学習していた。また、アメリカで調査した対象者もその多くが、日本への長期留学経験があり、さらにはアメリカにいながら一日中日本語のみを使う環境(イマージョン環境)の中で日本語を勉強していた。よって、今回に関しては日本国内・国外を区別することなく、英語を母語として背景に持つ日本語学習者という一つの群であるとして、分析を行うこととした。

### 2.3 調査期間、手続き

日本滞在学习者に対しては、2004年7月から10月にかけて質問紙を間接的に配布し、回答を郵送により回収した。また、アメリカ滞在学习者に対しては、2004年7月末から8月初頭にかけてアメリカの大学で行われた日本語のサマープログラムに参加している学生に、授業後の休み時間に質問紙の回答を依頼し、その場で回答を回収した。

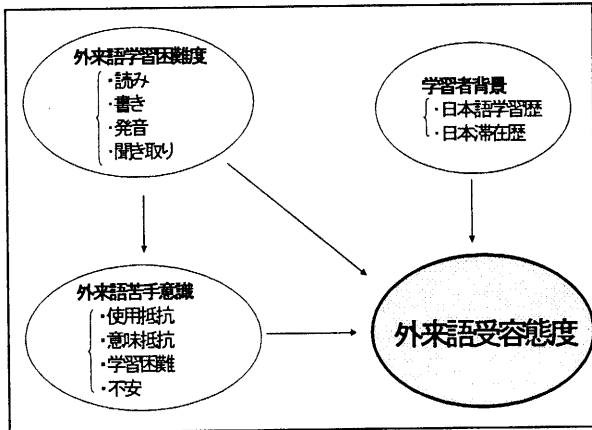
## 3. 主な結果(中間報告)

まず、日本語学習者は外来語学習における4技能に関して、困難を感じているという実態が明らかになった。つまり、外来語で書いてあるものを読むこと、外来語を書くこと、外来語の単語を発音すること、そして外来語の単語を聞き取ること、の4つに対して、日本語学習者は苦手意識を感じているということが分かった。

また、同時に日本語学習者が外来語に対して持っている苦手意識は大きく4つに分けられることが示された。外来語を使用することそのものに対して感じる「使用抵抗」、外来語の意味に対して抵抗を感じる「意味抵抗」、外来語を学習することに対して困難を感じる「学習困難」、そして外来語学習時や使用時に感じる「不安」などがそれである。この4

つの要素により、日本語学習者の外来語苦手意識が構成されていることが示唆された。

さらに、これらの外来語4技能習得困難度と、外来語苦手意識は、学習者自身の日本語学習歴や日本滞在歴などの学習背景と合わせて、日本学習者の外来語に対する態度に影響を与えている可能性が示唆された。



#### 4. 結果のまとめ

日本語学習者の外来語に対する苦手意識から「使用抵抗」「意味抵抗」「学習困難」「不安」の4因子が抽出された。

また、日本語学習者の外来語受容態度は、外来語の困難度、苦手意識に加え、学習者背景からも影響を受けていることがわかった。

#### 5. 今後の課題

今回明らかになった、外来語苦手意識や外来語受容態度に関して、日本語学習者の日本語能力や、日本語学習期間に注目してその傾向をさらに探索していく必要があると考えられる。また、外来語苦手意識や、受容態度の背景にある学習者自身の背景要因(第二言語や既習外国語など)との関連も今後明らか

にしていくことが必要である。

さらに、今回の研究においては扱わなかった、学習環境における違いにも考慮することが今後欠かせない課題となってくるであろう。そして、その後の可能性としては、今回扱った英語母語話者のみではなく、他言語母語話者をも対象に入れることがあげられる。そして、それぞれの類似点・相違点を検討することによって、日本語学習者全体の外来語苦手意識や外来語受容態度を明らかにしていくことが今後の課題として考えられる。

#### 注

- 文化庁(1997)『言葉に関する問答集-外来語編-』によると、外来語の定義について「借用語のなかの漢語といま一つは、中国語以外の諸言語から借用したもの、及び中国語から現代音によって借用したもので『外来語』という」とある。近代以降に中国から借用したものはとしては、「マージャン、ギョーザ、ラーメン」などがあり、これは外来語として扱われている。さらに、「その外来語の大部分は欧米の諸言語から借用したものであり、それらを『洋語』ともいう」とされており、本研究においては、この「洋語」に当たるものを「外来語」として扱うこととする。
- 対象者の殆どは英語を母語とする者であったが、うち数名は母語と第2言語(英語とその他の言語)の能力が同等でありそれらの区別がつけにくい状況であるとして、母語に英語を含む2つの言語を挙げたものもいた。

#### 参考文献

- 鈴木俊二(2000)「日本語における「外来語」観の変遷—接触言語学の視点からの考察—」『国際短期大学紀要』第14号27-94
- ブレム・モトワニ(1991)「日本語教育のネック—外来語」『日本語教育』74号28-33
- 堀切友紀子(2003)「現代日本語における外来語の研究」『金沢大学語学・文学研究』第30・31合併号43-51.